

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	人間にとっての涙、その価値の発見
Author(s)	松原, 俊一
Citation	児童の言語生態研究 , 13 : 18 - 30
Issue Date	1988-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045143
Right	
Relation	



特集

子どもの泣き

人間にとつての涙、 その価値の発見

松原俊一

一、「泣き」論・再考

柳田國男・涕泣史談から

小学校の国語教科書で古くから人気を得ている教材に、『とびこめ』（トルスト作・西郷竹彦訳）という物語がある。その最後の場面は、船のマストの上で危機に陥っているわが子を救うため、少年の父親であるこの船の船長が、鉄砲で撃つという設定になっている。父である船長の行為にあおられて、少年は数十メートルの高さのマストの上から、海にまっさかさまに飛びこみ、ようやく助かる。その姿を見て、船長が思わず嗚咽する。そのシーンである。

○ 「船長は、これを見ると、まるで何かにのどをしめられたように、とつ然大きな声でうめき出しました。そして泣いているところを人に見られないよう、自分の船室にかけこんだのでした。」（光村版・四年上）

○ 大人から見るともらい泣きをするような場面でも、子どもは必ずしもそうとは受けとめないようだ。

○ 自分が飛びこめと言ったことなのに泣くなんておかしい。自分が悪いと思って泣いたのかも知れないし、死ななくてよかったと思つて泣いたのかも知れない。

ど、とにかく私は、こういうときに泣くのはおかしいな、と思う。

（K・U・女）

私がこの子の感想に心をひかれたのは、「こういうときに泣くのはおかしいか」と思ったその思いである。船長の泣きを、後悔と安堵感からと推測し、肯定しつつも、なおかつ「とにかく私は、こういうときに泣くのはおかしい」と言い切っている。泣くのはおかしい」と言い切っている。泣くに至る船長の心の軌跡と、この子が日常生活で泣く時の心情と峻別させる感情の異なりを、本人なりに直観したからである。

他にも何人かあった、父親の泣きへのためらいは、主題に迫った読解をし

ていない」と指摘されるものではない。これは、子どもの感情発達と、船長である父親の感情表出との、相入れぬ狭間に覚えた四年生児の直観と見る。同時に私は、とにかくこういう時に私は泣かないか、と言い切るこの子の感情発達のあり方にひかれる。では、この子はどんな時に泣いて、どんな時に泣きに耐えるのか。そうした人間生存におけるこの子と「泣き」のかかわり方に関心がむかうのである。

こう思い至った時、柳田國男が昭和十六年に著した『涕泣史談』の中の一節を思い出した。柳田國男はその小論の中で、「人が泣くことは近年著しく少なくなつたのは勿論、子どもも泣く回数が少なくなつていくようである」と

まず指摘する。そして、『かつての日本人は、盆の魂送りはもちろん、節供の雛にも涙を流していた。これは泣くことを日常生活の言語表現の一手段とすら考えていたからであろう』と、推測する。しかるに、『泣くことが人間交通の必要な一つの働きであることを認めずに、ただひたすら之を嫌い憎み、又は賤しみ嘲り、なお泣くまいと努力している者が無いとも言えない』と、昨今の風潮を嘆く。

さらに柳田國男は言う。

『適当な言語表現がまだ間に合わなかったがゆえに、この特殊な泣くという表現方法を用意していたので、それで相手の気持ちを通ずるならば調法と言ってもよかつたのである。むやみに抑圧せずに、ただ濫用を防ぐやうに教育すればよかつたのである。』そして最後に、『泣きに代る適当なる転回なり、代用なりというものが、果して調子よく行はれているかどうかということは、国を愛する人の忘れてはならない観察点である』と、『涕泣史談』を結んでいる。

数年前に読んだこの小論の印象が今日まで鮮かなのは、柳田國男が、人間の泣きの問題を人間教育の側面から捉えようとした、その卓見への畏敬があつたからである。確かに最近の子どもは、繁雑に笑い、喋り、恐りはするが泣くことは少ない。また教師としても泣いている子を見ると、「男は泣くも

のではない」とか、「泣かずに涙を話してごらん」と、安易に口をすべらせている。

かつてあれほど幼少児期に泣いていた子どもも、小学校の中・高学年になると人前ではほとんど泣かない。そうした子どもも、思春期になって武者小路の「愛と死」を読んで涙を出し、友情の欠別に泣く。また、いじめられたり怒られたりしても泣かない子どもも、情感を伴う説諭をされると泣く。さらに、人前では泣かない、もらい泣きをする、甘い泣きをすぐする、椰揄され落胆した時だけ泣く、など、子どもの泣きは多種多様である。かと言って子どもは、例えば次のような泣きを、どの子ども一律にするというものでもない。

泣き明かす	泣き詰む
泣き溺れる	泣き流す
泣きくずれる	泣き寝入り
泣き口説く	泣き罵しる
泣きくらす	泣きべそ
泣き狂う	泣き惑う
泣き恋う	泣き転ぶ
泣き焦れる	泣き悶える
泣きしおれる	泣き寄り
泣き慕う	泣き佗ぶ
泣きすがる	泣きわめく
泣き倒れる	泣き笑い
泣き立つ	泣き尽くす

小学校一年生がいかに泣きけんで

も、人はそれを「泣きくずれる」とか、「泣き口説く」とは言わない。またパートでおもちゃを買えと子どもが泣いても、それを「泣きすがる」とは言わないし、「泣き悶える」とはまちがつても言わない。「泣きくずれる」や「泣き悶える」には、自ずと一つの感情表出の場面や状況が連想され、そこには小学生の生活実態とかけ離れた妖艶性が連想されてくる。

一方「泣き明かす」は、古代、明かりのない生活をしていたとき夜明けまで泣くことを意味し、今日の生活ではもはや体験できない。「泣き詰む」も今日の人間の感情生活では理解しにくい言葉である。ちなみに、『泣き』の複合語は、小学館版・日本国語大辞典によれば、八ページ以上にわたり三百語近く、掲載されている。では、小学校四年生の言語生活の実態ではどうか。私の調査によれば「泣き」の複合語を、最高に書き出した子どもでも、二十八語にとどまっている。こうして人間生活の「泣き」の様相をふり返った時、それは人間の成長や、時代変遷にともなう感情表出のあり方と、深くかかわりあうことがわかる。

屈服の涙から共感の涙へ

人は泣く時に、悲しかったら泣き、くやしかったら直ちに泣くというほど、短絡的なものでもない。俳優を除いて、いついかなる時に泣けるもので

もない。泣きたいと思う心と、泣く行為の間には、人間の成長発達に伴う関わりがあるように思う。例えば、幼児期に人前で臆面もなく泣いた子ども、ある時期が来ると、人前をはばかり物陰でそつと泣くようになる。これは、見る目見られる目を意識する、人間の相互感情発達の影響である。泣くという行為が、表情の変化と涙を伴う全身運動であるだけに、恥しいと思う心がついてまわり、泣きの状態にも、発達変化をおこすのであろう。人がいつ泣くかという姿を見てとることは、やはりその人の成長発達の見届けることにもなる。特に、思考感情発達の顕著な小学生にあつて泣く行為は、その子の成長段階を示す指標でもある。

再び本論の冒頭にもどる。(K・U)子はそこで、<>にかく私はこういうときに泣くことはおかしい<>と、感想文で述べていた。<>おかしい<>と指摘するのは、大人のくせに泣くのはおかしい、ということではなからう。<>いうと<>、<>き、<>と言うのは、子どもが助かつたのに泣くことを指すのか、あるいは人前をはばかり泣きを見せたことか。また自らの意志で選んだ行為の結果を見て泣いたことか。そのいずれかにしても、この子の関心はそうした父の泣き方に向かっている。そして、<>いう時に泣くのはおかしい<>と言うのである。この子には、人はいつ泣いたら

いのか——、について本人なりに認識しているものがあるのだろう。その認識との格差を直観したために、船長である父の泣きを批判したのである。

では、この子はいつ泣くのか。いかなる状況でどんな気分が高まり、それがどう流れた時に泣くのか。その心のあり方を見届けることなしに、(K・U)子の感想文を仮りに、作品の主題に迫っていない、と評価した所で子どもは救われない。また感想文指導も進展はしない。

冒頭に引用した『涕泣史談』の一節に、泣くことに耐え忍ぶ子どもを思いやる柳田國男のやさしい一文がある。

「なほ一方には泣くことが人間交通の必要な一つの働きであることを認めず、ただひたすらに之を嫌ひ悩み、又は賤しみ嘲るの傾向ばかり強くなっていることを考えると、惑ひは稀には不便を忍んで代りの方法の一つも無くても、なほ泣くまいと努力しているものが無いとも言えない。」

(傍点・筆者)

涕泣史談のこの一節と、(K・U)子の感想文が、私には二重写しとなつてくる。即ち、この子が、「こういう時に泣くのはおかしい」と、批判するのは、感動極まって涙を流す真実の涙の価値を、まだ知らないためののか、あるいは、涙に恥を連想し、あえてそれを拒

絶する屈服の姿勢なのか。仮りに後者であるとすれば、柳田國男が同書で、「泣きさえしなければ子どもは常に幸福と速断するのは考えものである。」

と重ねて指摘しているように、何と不幸なことか。昨今の子どもたちが、日常生活で殆んど泣かなくなつたのも、涙への拒絶心が意識にあるためだとしたら、泣くまいと努力している子どもが浮かび、あわれである。

柳田國男が『涕泣史談』で泣きの衰退を指摘したのは、昭和十六年である。以来この問題は、昭和四十七年に、多田道太郎が『しぐさの日本文化』の中で触れているのみである。多田道太郎は、人前では泣かない、泣くことは、みつともないと日本人が思ってきた背後には、「霊との共感を失っていった近代人の道程がある」という。また、「人は次第に他人が泣くことに対してこらえ性をなくした。その道程が文明である。他人の泣き声、涙に対して、その中に分け入って共感することができなくなり、こうして、泣くことはみつともない」という社会的、倫理的規制ができた。また他人が泣くことに人は寛容でなくなつた。」

と、涙に決別をつけた近代人の道程を指摘する。従って日本人の涙は、ぐつとこらえ、しのび泣く涙で、「泣く」という露骨な感情表現をきらう社会秩序

に我が身を適応させるといふ姿勢の表現」でもあるという。そして、

「この屈服の涙から共感の涙へと、もう一度逆行させながら発展していく道すじを未来社会の姿として想い描きたい」

(傍点筆者)

と『しぐさの日本文化』を結んでいる。

柳田國男の涕泣史談以来四十年間、柳田が願ひ、多田道太郎が想ひ描いた「泣きの世界」は、未だ現われていない。従って仮りに、(大きな仮定であるが)、本論冒頭の(K・U)子のためらいが、柳田—多田論の延長線上に位置付くものと仮定するならば、子どもは日々涙を拒絶する屈服の構えから、解き放たれていないことになる。こうした思いが、『涕泣史談』の論旨と相まって限りなく広まっていく。ともかく問題は、国語科の感想文の評価から離れて、小学生の「泣き」の様態をさぐっていくことになる。

二、子どもの「泣き」その三態

子どもは泣かない

柳田國男は、昭和十六年に、多田道多郎は昭和四十七年に、人は泣かなくなった」と憂えた。では二十一世紀を目の前にした昭和六十年の子どもはどうであろうか。昭和六十年一月から五

月にかけて、東京M区・日小学校三、四学年(四月に進級)児を対象に次の質問をし、その反応を求めた。

○質問—あなたは先月何回泣きましたか。その回数と、泣いた理由を書きなさい。

五ヶ月間でのべ百五十日とし、その中で何回泣いたかという回数を、まず集計したのが次の表である。

百五十日で泣いた回数(のべ数)

泣いた回数	人数
0回	1人
1回	8人
2回	6人
3回	4人
4回	2人
5回	3人
6回	4人
7回	2人
8回	1人
9回	0人
10回	0人
11回	1人

五ヶ月でかりに5回泣いたとしても、月平均一回である。その回数は予想以上に少ない。この調査で気付いたことは、子どもたちは自分がいつ泣いたか、またその理由は何か、について実に克明に記憶していた点である。特にこの時期の子どもたちの喧嘩は、相手が泣いたか、泣かないかで勝敗の判定基準にしているため、泣く行為は深刻なものなのである。一方、友達同士でも、某君がいつ泣いたか明確に記憶している。泣きは、まだまだ屈服の泣きと受けとめている時期なのであるうか。

次の円グラフは前掲表に基づき、一

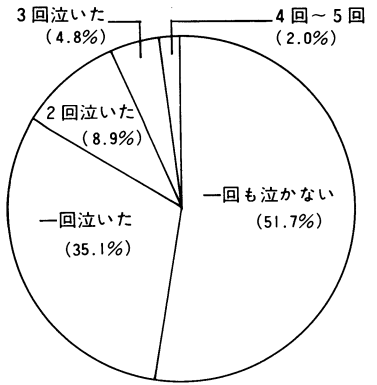
【泣きたいとき】

- ・友達からしつこく、バカなどと言われたとき----- 8
- ・なぐられて痛いとき----- 5
- ・ころんでけがをしてとても痛いとき----- 4
- ・コソコソと自分の悪口を言われているとき----- 3
- ・仲よしの友達にきらわれたとき----- 2
- ・自分のいやがることを友達からされたとき----- 2
- ・先生からおこられたとき----- 2
- ・勝負にまけてとてもくやしいとき----- 2
- ・知っている人や、犬、ねこが死んだとき----- 2
- ・のけものにされて一人ぼっちのとき----- 2
- ・授業中に発表できないでいるとき----- (以下各1)
- ・みんなの前ではじをかかされたとき
- ・大切にしていたものを盗まれたとき
- ・知らない人や、友達からやさしくされたとき
- ・宿題につまってこまるとき
- ・無実を自分のせいにされたとき
- ・長年の念願がようやくかなえられたとき
- ・けんかをして負けたとき
- ・おばあちゃんの田舎からサウナラをするとき

【泣きたくても泣けないとき】

- ・知っている人がいるから恥しい。こらえてしまう----- 3
- ・くやしくても泣くと自分がみっともなく感じるから----- 2
- ・泣き虫、弱虫と言われる。泣き虫じゃないと思うから----- 2
- ・先生におこられても人前だから泣けない----- 2
- ・お父さんに「がまんしろ」と言われる----- (以下各1)
- ・バカにされても、くやしい時は泣いてはいけな
- ・マンションで泣くと、泣き声が外に聞こえる
- ・ぶたれても、お兄さんだからがまんしなければいけない
- ・泣こうとしたけれど妹に顔を見られたから
- ・「よーし、泣くもんか」と思ってがまんする
- ・年下の人の前で泣いたらどんなに恥しいか
- ・「悪いことをした」と後悔したから泣けない
- ・泣くともっとひどいけんかになるから
- ・友達が転校した時、泣くとよけい悲しくなる
- ・「ほーら泣くぞ！」と言われるから
- ・「〇〇のよわ虫」と言われるから

一ヶ月を通して一回も泣かない子
 のである。
 ケ月間で泣いた回数の平均を求めたも



(一ヶ月平均の泣いた回数)

と、一回泣いた子で、全体のほぼ九割を占めている。子どもに質問した際、いつ泣いたかをしきりに考えていたのも、この結果から見ると妥当なことである。これは、小学校三年生が四年生に進級する時の傾向である。従って高学年に至れば、なお泣かない実態が予測される。

子どもは泣きたい

では、現代の子どもは泣くことから隔絶した次元に生きているのか。また、悲しみは忘却のかなたに消えた生物に進化を上げているのか。そこで、子どもが、『泣きたいとき』はいつで、『泣

きたくても泣けないとき』はいつか、その実態を見届けることにした。
 一ヶ月で九割の子が一回泣くか泣かない現状を思う時、彼らには泣きへの衝動は全くないのかと思いきや、実はそうではない。学級内のどの子も、泣きたいと思う心情に至っている事を吐露している。左上表の各理由の背後にある心情を分析しても、

・みじめさ	・感動	・切なさ
・悔しさ	・反抗	・嫌悪
・淋しさ	・哀惜	・腹立ち
・痛さ	・恥しさ	

など、人間感情の多様さを思わせられる。こうした感情に捉われても、この子どもたちは涙を流し泣きに陥ることは決していない。一ヶ月に一回も泣けば泣いた方に入るといふ感情生活を送っているのである。それでは子ども達は、こうした泣きたいと思う衝動をどのように処理しているのか。泣かずともすむ感情処理を見出し生きているのか。あるいは、泣くことに抵抗を覚え、必死に耐えようとする生活をしているのか。次表がその解答である。

子どもは泣けない。

前頁資料から見る限りでは、子どもたちは泣く事に背を向け、人前では泣かない、泣くことはみつともない、と思う感情に捉われていることがわかる。本来、泣く行為はそれ自体がことばでは代用できない感情の鮮明な表現形態であった。また、ある種の感情表現に際して適当な言語表現がまだ間に合わないために、人はこの特殊な「泣く」という表現行為をとっていたのである。柳田國男は、

「それで相手に気持ちを通ずるならば、実は調法と言ってもよかつたのである」

とすらい切っている。

しかし近世の日本人は「泣き」や「涙」を嫌い忌ましいものとして受けとめてきた。そして、人前では泣かないものだ」という社会的・倫理的はざまの中で、屈服の涙を保ち続けてきたと言っているのは、前掲書「しぐさの日本文化」の要旨である。

子どもたちの実態もまさにこの域から出ていない。右資料のどれを読んでも、切ないほど泣きの衝動に絶える子どもの姿が見えてくる。そして子どもは、そうした涙の虚絶を、十分に肯定させている。柳田國男が次のように指摘した姿がそこに見えている。

「或いは、稀には不便を忍んで代りの方法は一つも無くても、なほ泣く

まいと努力しているものが無いとは言えない」

たしかに子どもたちは五ヶ月間に数回しか泣かなかつた。それは、泣きたくなかつたのではなく、泣きたくてたまらない衝動を、日常的に持っている。しかも泣きに耐えることを良しとする認識を、一方で固持していたのである。

三、人はどんな時に泣いたらいいか

涙の価値の発見へ

悲しかったら泣き、苦しかったら泣く、というほど子どもの泣きは、単純ではなかつた。泣くことを恥じる心が、他に代りの方法が一つも無くても、お泣くまいと努力させていた。この姿が今日の子どもの実態であつた。しかし、人間の泣くという行為は全てが忌まれるものではない。生きるもの生死に際して、また感動を受けた時、泣くまいとしても涙が出る。これは人が人たる由縁であり、そうした美しい涙を流せることは、人間がより価値ある人生を築いていく所左でもある。泣くべき時に泣くのは、恥しいことでも何でもない。むしろ心の豊かさが見えてくると言うことを、やはり子どもたちは知らなければならぬ。そして、どんな時に泣くことが、より望ましいのかを実感できたとき、子どもが一步成

長をとげた時の姿と見ている。これは、子どもが越えなければならぬ人生の課題でもある。人間の泣きを授業でとりあげたのは、以上の理由による。即ち、人はいつ泣いたら良いか、という人間生存における涙の価値の発見である。

いま、子どもたちに、涙の価値の発見に向かわせようとする時、授業のステップとしておさえておかなければならない問題が、いくつがある。その一つは、人が泣くという行為を客観的に分析していく目である。子どもは、自分はどういう時に泣くかすら、整理できていない。その事を問えば、くやし泣く、とは答えても、くやしさがどのくらいから悲しいから・おそろしいから泣く、とは答えても、くやしさがどのように高揚した時、ついに泣く瞬間が来る、という自己分析はしていない。例えば、悲しいから泣くというのは、一種の甘えであろう。甘えが未だ残っているために、今私は泣き、泣いたら誰かが助けしてくれるだろうと無意識に思い、涙をこぼすのである。こうした自分の泣きに至るプロセスが自己分析できた時、甘えの泣きを子どもはもはやしない。そしてより価値ある涙を求めて行こう。

今一つは、自他の泣きの比較である。A男が泣く時とB男が泣く時の違いの発見から始め、自他の感情表出の異なりを考え、泣きの様相を自覚させていくことである。これには、灰谷健次郎・

作『ワルのポケット』の作品を教材として活用し、登場人物のさまざまな泣きを、気持ちの流れから分析させた。

こうした学習は、泣きたいと思う気持ちと泣きに至る心理過程を内観し、それを言葉で言いあて心理過程の構造図を作る事を目的とした。その構造図作成過程で、子どもは自他の泣きに至る心理を客観視するようになる。いわば自他の泣きに至るプロセスを再構成し、そこから人間として価値のある泣きの姿を、つかませようとしたものである。

授業で活用した教材

ワルのポケット 灰谷 健次郎 作

いいわけするやつは人間のカスや

「小学生とは思えん悪いことをする。万引きだなんて、じつに不名誉な……」

六年主任の横田先生は、そういつて怒った。

(なんでバレたんやろ。アカンタレもつかまってないのに……。だがつけ口をしたんやろ)

校長室に立たされてる八人は、みな同じことを思っていた。

一年から六年の主任の先生とセイゾウたちの担任が、校長室にいた。

「一年生が大切に育てている草花の鉢を、通りすがりに足げにしてこわしていくんです。ほんとにこの子たちには、やさしさというものがあんでしよう

か」

一年の主任がいった。

「あの時はアカンタレが、あやまって鉢につまずいたんや。アカンタレひとり叱られるのはかわいそうやから、ついでにわいらも鉢、こわしてやっただけや」

そやけど、いいわけしたらあかん、センコにいいわけするやつは人間のカスやと、みんなは思った。

「わたしのクラスでは、物かげにつれこまれて小づかいをまきあげられた子がいるんです。被害を受けた子は気の小さい子だったものですから、それ以来、その子はおびえて学校にくるのをいやがるようになったくらいです」

五年の主任はそういった。
（それは違うワ。あのガキは家から金を持ち出して、ひとにおごってやっつては友だちを自分のけらいのようにして、わいらが天罰をくわえてやっつたんや）
そやけど、いいわけはせえへんで、センコにいいわけしたら、あのけつたくその悪いガキといっしょになってしまふさかいな、と、やっぱりみんな思った。

「手に負えんワルやな」
苦虫をかみつぶしたような顔をして
「悪い芽は早く摘んでおかんといかん」

と、校長先生もいった。

「おまえら、ちいと反省しとるんか」
横田先生がいったが、だれも返事をしなかった。
「こら！」

横田先生はどなった。
ソーメンがびくんとからだをふるわせた。八人のうち、トメコとソーメンは女の子だが、からだの細いソーメンは、トメコとくらべるとずっと気が小さい。
「ここへ、おまえたちの親を呼ぼうか、それとも、警察へつき出そうか」

横田先生は八人をおどした。
ソーメンがひいーと泣き出した。

涙がそんや

「だれがつけ口したんや」
校長室から出ると、セイゾウはじろろみんなを見ていった。

「わいとちがうで」
「わいとちがうで」
みんな口ぐちにいった。

「ほな、おかしいやないか。なんでセンコが知つとったんや」
「そんなもの知るかい」と、オタやんはいった。

「ゲジゲジが調べたんやろか」
ゲジゲジは横田先生のあだ名だった。

「あのゲジゲジ、ほんまにしようがないやつやなあ」
と、セイゾウはいつて、ソーメンが

まだ泣いているのを見ると、

「ソーメン、もう泣くな。涙がそんや。家にいつけるといよいよだったけど、そんなもん、おどかしだけや」と、なぐさめた。

「そんなことしてみい。わいもゲジゲジの秘密を知つとるさかいそれバラしてもたるわい」

「なんや。ゲジゲジの秘密いうて」と、ダボがたずねた。
「ゲジゲジの靴の中に、このへびを入れてこましたろか」

と、ダボはゴム製のへびを、指の先でぐるぐるまわしながらいった。
「梶島先生に悪いことをしたんちやうか」

と、トメコがいい出した。
八人も梶島学級だったので、セイゾウたちが叱られている間、梶島先生は泣きべそをかいていたというのである。

梶島先生は今年、よその学校からかわってきたばかりのまだ若い女の先生だった。

セイゾウがちよつと困つたような顔をした。

アカンタレの涙
教室に帰ってきた梶島先生は、すぐ

にものをいわなかつた。
だまって、イスを九脚前に出した。八脚を半円に並べ、一脚をその前に置いた。それから元気がない声で、

「おすわりなさい」といった。

子ども用のイスにすわつた梶島先生は、小さく見えた。それでセイゾウたちも頭を垂れ、小さくなってすわつた。
「話してちょうだい、どうしても」
いった。

オタやんは横目を使ってセイゾウを見た。セイゾウも横目を使ってオタやんを見た。反抗する相手がいれば堂々としていられるけれど、急に病気にでもなつたような弱々しい梶島先生を前にして、みんなは勝手の違うものを感じたのだつた。

「みんなが話してくれるまで、先生はじつとまっています」
梶島先生は手をひぎの上に置いて、ほんとうにいつまでもまつ氣らしく、それつきり口をきかなかつた。

みんな、もじもじし、心の中でどうしようと思つた。

十分たつたけれど、梶島先生の姿勢はそのままだった。

運動場で遊んでいた子どもたちはもう帰つてしまつたのか、遠くから聞こえていた声も、いつのまにか聞こえなくなつた。

寒さを感じるような季節でもないのに、みんなはなんだか寒い氣持だつた。トメコは小さくからだをふるわせていた。

（どうしよう）
みんなは心の中で、同じことを考えていた。

あのことはどうしてもいわれへん。けど……。

みんなはちらつちらつと柗島先生の顔を盗み見た。柗島先生は必死でなにかに耐えているようだった。肩が小さきみにふるえていた。

(先生泣いている)

みんなどきどきとした。背中に寒いものが走った。

柗島先生は泣いていた。一度涙をこぼしてしまおうと、もう後は、とどめるすべがないようだった。肩のふるえが大きくなり、涙が床にぼたぼた落ちた。(どうしよう)

(どうしよう、どうしよう)

セイゾウが心の中で悲鳴をあげた。

トメコは真つすく顔をあげ、半分泣き顔になってあちこちを見た。

(いわれへん。けど……けど……)

そのときだった。

とつぜん、アカンタレがしゃべり始めた。

「ああああああん あーあん あああああん あーあー あああああん ああああ ああああ あん あん あん あん いい うん。ああああああん……」

アカンタレは顔を真つ赤にさせ、頭を左右に振ってしゃべりつづけた。

「ああああああん。あんあん ああああ いいいいいいい あーあーああん ああああ ああ あーあーあーあーあーああん」

アカンタレのひたいから汗が吹き出た。

「あああああ あんあん うんうん あーあ あんあん うん いいいいいい あああ ああ あーあーああん あんあん うーうん いいいい あんあん ああああ……」

アカンタレの口から、よだれが糸のように垂れた。なにかにつかれたように、アカンタレはしゃべりつづけた。柗島先生は大きく目を開いてアカンタレを見た。アカンタレが何をいつているのか聞こうとした。

「ああああん あーあーああん ああああ ああ いいいいいい うんうん あーあーああん あんああああ ああああ……」

アカンタレはセイゾウを指さし、手を振って叫び、ダボを指さし叫び、トメコを指さし、ソーメンを指さし訴えつづけた。

アカンタレの顔は、涙とよだれで白く光った。

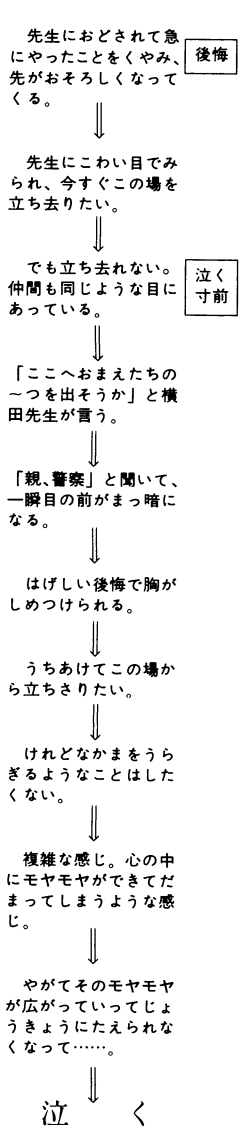
柗島先生は、そんなアカンタレをじっと見た。

柗島先生の目につよいおどろきの色が走り、それからなにかにわびるようなやさしげな目をした。

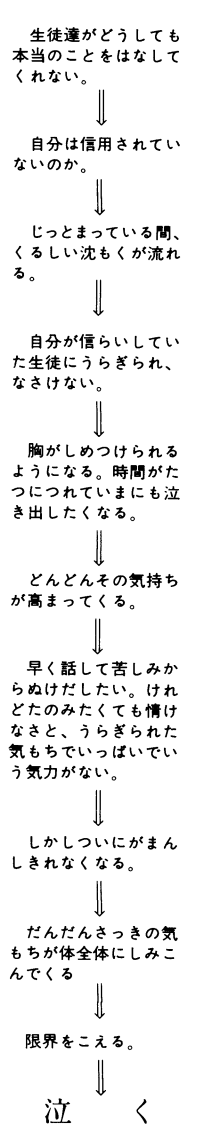
この作品には、三つの泣きが表示されている。ソーメン、柗島先生、アカンタレのそれぞれの泣きは、泣く動機や、泣きに至る過程がどれも異なる。この三人三様の泣きを分析し、その心理過程を言葉で図示する授業を行った。これは、自分の泣きを内観させていくためにも重要なものである。左の図は泣きに至るソーメンと、柗島先生の心理過程を追わせながら、精神分析的にとづけをとらせたものである。

泣く行為は同じでも、その発端が異なり、プロセスも異なる。前者は後悔から始まり、後者は生徒が心を開いて

ソーメンの泣き(授業で子どもと共にまとめたもの)



柗島先生の泣き



くれない切なさからである。またその過程を追っていくと、泣きが、精神抑圧の限界に至った時に起きる現象であることもおさえている。左上の図は、アカンタレの泣きである。

上図は、不安感から迷い感に入り、迷いの限界に至ったとき、涙が出、泣きに入ったとおさえている。下図は、迷い感から入り、自己制御の限界に泣きが来るものとおさえている。いずれ

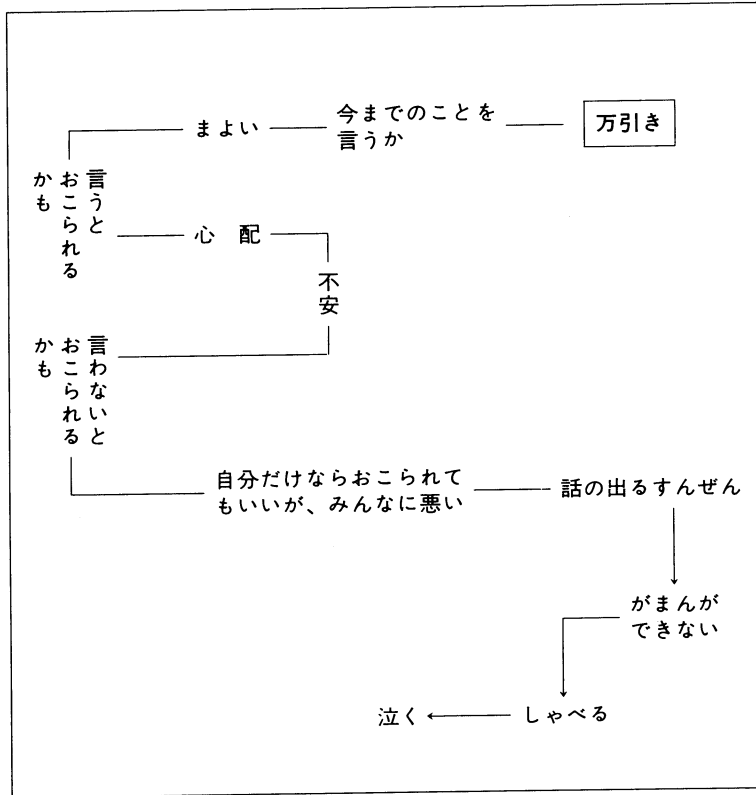
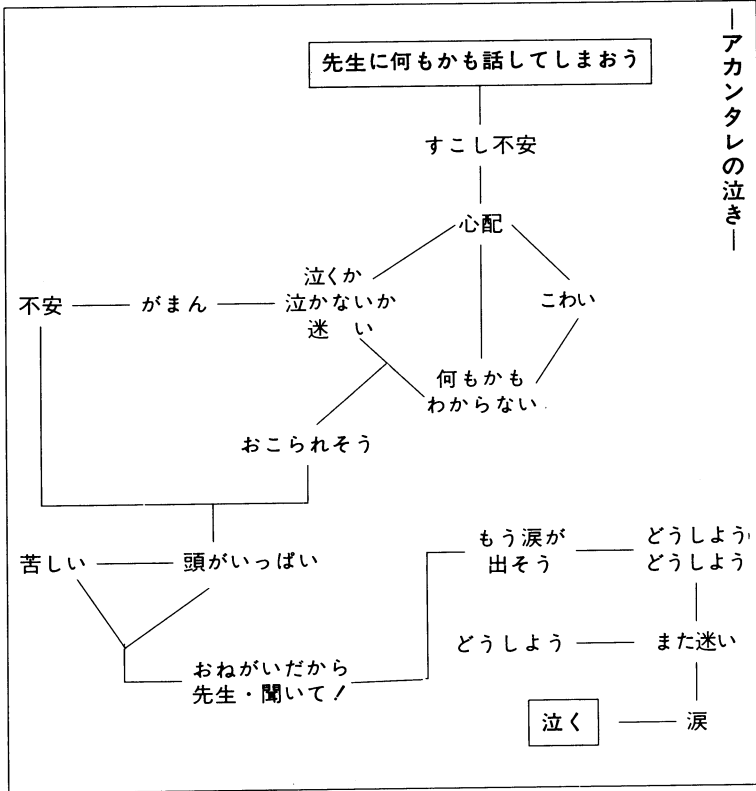
にしても、さきの二人の泣きとはその動機や心理過程からして異なるのあることを、的確におさえている。

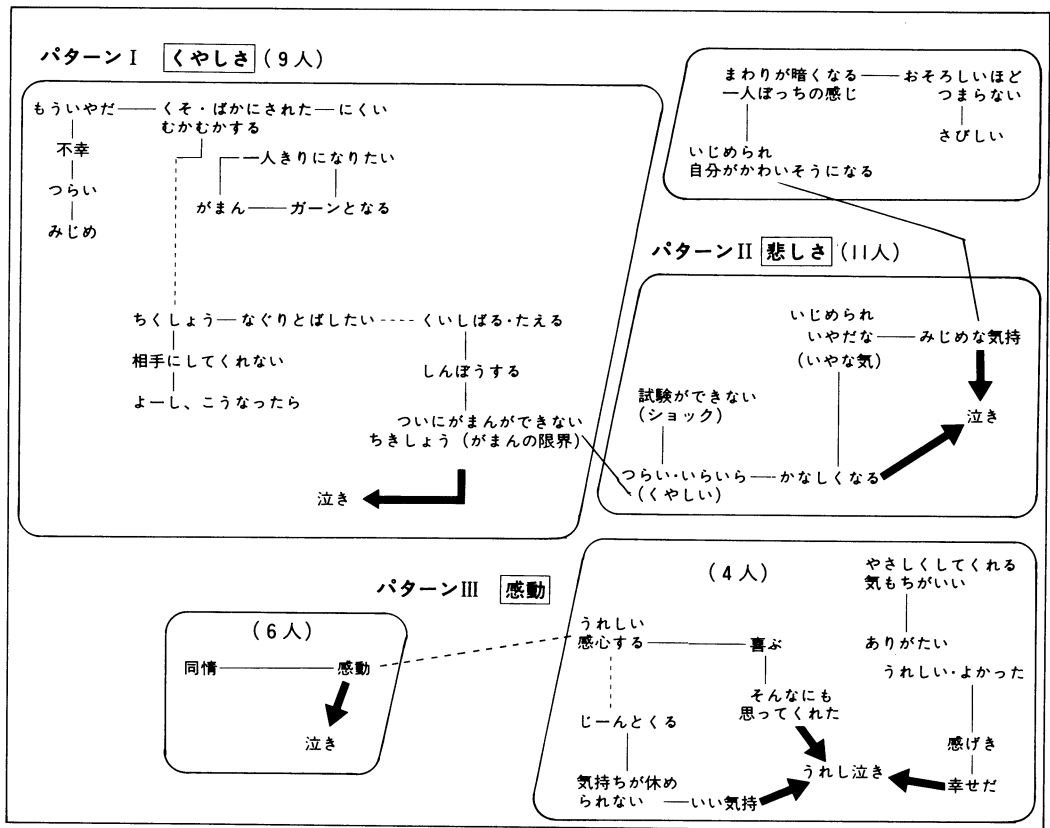
この分析図を見ると、漢語使用は、「心配」「不安」の二語のみで、あとはイメージを言葉に置き換えている。自分が把握しなかったイメージを計量し、それを感覚的に言葉に置き換える作業を行っているのである。これは自分の感覚を冷やし、漢語として知的に

把握し置きかえるまでには行っていないが、三人三様の泣きの様相を、心理過程として十分に捉えている。

こうして、人間の泣きを客観視する視点は、子ども自身が、自分の泣きにもまつわる感情を見つめていく姿勢にもなっていく。この学習は、まず自分が泣く場面を思い出し、その心理過程を自己分析し、右のように図示させていった。子どもたちが各人なりに図示し

た、泣きに至る過程を見ると、次頁に見るように、その根源の一つは「くやしき」である。そして、「悲しき」である。くやしきと悲しきのパターンは、いずれも「みじめ」さを伴う。今一つは、「感動」の泣きである。同情されたり、心にヒーんと来る場面に對したとき、涙を流す。26ページの図は子どもたち一人ひとりの泣き方を、組み立てたものである。パターンIは、「くやし





いゝ気持ちが泣きを生むと捉えている。パターンIIは、「悲しい」気持ちが泣きを生み、パターンIIIは、感動そのものが、泣きを触発すると捉えている。実線は、子ども自身が自己の心理分析の結果、泣きに至る経過を示したものの。点線は、パターンIの関連と、子どもの分析相互の関連を、私が仮りにおさえたものである。これは、このあとの授業で、子どもの発言を相互に結び付けていく時の、大切な資料となる。

涙の価値の再発見

「くやしくて」泣く

子どもは日々ほとんど泣かない。さきの調査では、小学校三、四年生でも、一ヶ月に一回泣けば多いほうであった。これは、「人前では泣くものではない」と思う、泣きの衝動に必死に絶えている姿でもある。かと思うと、叱られては泣き、仲間外れされては泣く子ども一方にはいる。これは、悲しいから泣き、泣くことで同情を買おうとする、甘えの姿勢であろう。子どもの泣きは、それに耐える姿を示すか、あるいは甘えの泣きに入るか、いずれも極端の域を出ないのは、まだ人間の流す涙の価値に気付かないためであろう。本授業は、子どもたちに、自分の泣きを客観的に見つけさせ、その上で、涙の価値発見に至らせることを目的として、行

つたものである。

教師「これまでの時間は「ワルのポケット」の中の、ソーメン、アカンタレ、椀島先生、この三人の泣きを考えてきました。そして自分は、このように泣く、泣かない、とも指適しあいました。そこで今日は、自分はどうな時に泣くか、それを分析しあいます。みんなが考えた泣きの流れ図を先生の方で似たもの同士で、三つのグループにまとめました。

——このあと、第一グループ(くやしい時に泣く)、第二グループ(悲しい時に泣く)、第三グループ(感動した時に泣く)、のどこに自分が所属するか確認させた——

教師「では最初に、くやしいから泣くという人たちの考えを聞こう。」

C「私がくやしくなって泣くまでの間は、始めくやしくなった時、その次に相手の人に腹が立ってきて、今度は、自分が悪いのかなあとという気になってきて、それから涙が出そうになって泣いてしまいます。」

C「僕は今の人の考えにちよつと違うんですが、誰かが何か言っているから、何だと思っ行ってみるんです。すると僕のこと何かわるんことを言っているからムツとして、心の中あの野郎なんだよ! と思うんです。するととつとひどい悪口がドンドン出てくるような気がしてくるや

しくなつて、とびかかろうとする時には、もう誰もいなくなつて、あの野郎……と思つて泣くんです。」

C3 「僕の場合は、何もしていいのにいじめられることが最初なんです。」

教師「ああ、いじめられた時ね」

C3 「それで最初の方は何もわからなかつたんだけど、あとの方からじわーつと湧いてくるの。それでやられてから相手が帰つてもあいつのことぶんなぐつてやりたいな、と思つても本当はもつと心の奥では、そんなことをやつたらまたやられちゃうな、つて言う感じで、少しの間我慢してゐるんだけど、そのうち我慢できなくて、泣いてしまふんです。」

教師「我慢できなくなる、というのは？ そのあたりをくわしく言つてほしいなあ。」

C3 「最初の方は、くそーつて思うのが小さいんですが、だんだんとそれが大きくなつてくるんです。自分が考へている事は、その人に仕返しをしてやる、という事なんです。やつつけてもやられてしまふ心配も大きくなり、もうその心配ばかり大きくなって、それで泣いてしまふんです。」

C4 「僕もいじめられた時は最初何とも感じなくて、だんだんいじめられる内に、もう怒つて仕返しをしたくなるんです。でも相手は僕より強いし、

余計やられてしまふ。それでも我慢できなくなつて泣きます。」

教師「泣きたくなくても高まつてくるわけだろう。それがずーつと来て泣くわけだね。その泣く寸前というのはどうなるの？」

C4 「泣きたくなかつたんだけど、もう仕方なく、これだけやられちゃうたらもう我慢できなくなつて、ついに泣くんです」

C5 「前のことだけどね、友達とふざけていたら泣いたの。それで家に帰つたら友達のお母さんから文句の電話がかかつてきたんです。聞いていると嘘ばかり言うので、始めは我慢していたんだけど、でも聞いてみると、どんどん文句や悪口を言われて、それでも我慢していたんだけど、そのまま聞いてゐる内に、くやしくてくやしくてとうとう我慢できず、泣いちゃつた」

C6 「僕は水泳がうまくないのでプールで練習して次の日に試験を受けたのにできなくて……、それで何て言うのかなあショックを受けて……」

教師「そうか。ショックを受けたんだな。練習してゐてできなくてね」

C6 「それでつらい気持ちになつて、あーあ、あんなに練習したのにくやしくて、つらい気持ちになつて、それでくやしくなつて、悲しくなつてだんだんに泣いていく……」

教師「あーあ、あんなに……というよ

うにジーンと思うわけだな。それでくやしくなるんだね」

C7 「私はね、上級生の人達にいじめられた時、初めいやーな気持ちになつてきちやう。そしてだんだん悲しくなるんです。みんなでいじめてくるからとても惨めになつて、だんだんだんだん泣きたくなつて来て、泣こうかと迷つていて、そのうちに泣いてくる。」

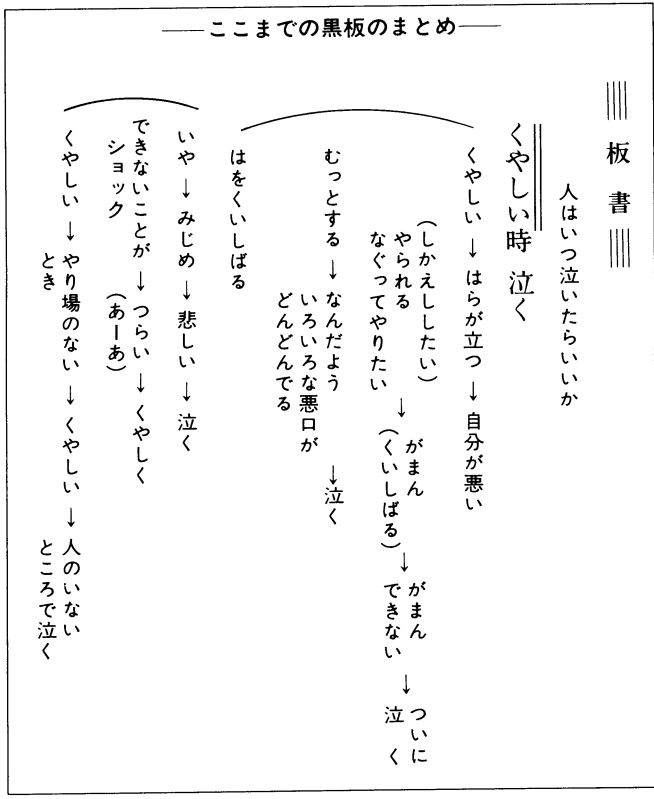
教師「いやーな感じになつて、惨めになるわけだ。そして泣こうか、泣くまいかと思うわけだ。」

C7 「そういう風に思つてただけで、そのうちものすごく悲しくなつて来て、泣いちゃうんです。」

教師「さっきの伸也君は、話す時に口をとがらせて、いかにも悔しそうだったでしょう。今の史江さんの話を聞いていると、だんだん暗い気になつて、体が下に向くようですよ。」

C8 「僕も経験があるんですが、今の話のように惨めのような、悔しいような腹がむかむかしてきちやうなんです。けれど相手が帰つてしまつて何

——ここまでの黒板のまとめ——



もできないし、その人の名前もわからないって風に思うと、悔しくて悔しくて、だんだん胸の中が苦しくなってきた、最後にかんしゃく玉が破裂してガーンと言ってやりたくなくなるんです。でも、いないのがわかると、もつと早くやり返せば良かったと思つて、後悔して泣いちゃうという事もありました。」

教師「智和君も泣くのか？」

C8「えっ。やっぱり人のいないところで泣きます。」

「悲しくて」泣く

教師「今までの発表は、ぐくやしくて、泣くという人の、泣きに行くまでの心の流れ方でした。今度は、悲しくて泣く、という人たちの考え方を聞きます。」

C7「私は、初めいじめられたので悲しいって感じになって……」

教師「悲しいって言うのは？」

C7「うーん、何て言うか、何か自分が惨めな感じになってきて……」

教師「惨めって言うのは？」
C7「自分がかわいそうな感じになってきて、それで最後にはこんなことになっちゃったんだなあ……と思つて、自分がかわいそうでかわいそうで仕方がなくなってきた、それで泣いてしまいます。」

教師「そうか。かわいそうでかわいそうで仕方がなくなるね。うん。かわ

いそうで仕方がないから、いくつかあつて泣くわけでしょう。その間のことはまだあるんじゃないの。かわいそうでかわいそうで仕方がなくなつて、そして？」

C7「それで、泣こうか泣くまいか迷っているんだけど、どうしても涙が止まらないという感じになって来て、しようがなく泣いちゃうの。」

教師「自然と涙が出てくるわけだ。」

C9「僕は悲しいというのは、自分がかわいそうになってじゃなくて、悲しいって言うのは、いろんな目にあつて、それで一人ぼっちと言う感じになつて、もう廻りが暗くなつて、まっ暗で自分一人だけ闇の世界にいるという感じになつてから、淋しくなつて、恐いほどつまらなくなるんです。」

(自分の心理過程を内観し、それを言葉におきかえているため、子どもの発言は得てしてこうした冗長性がある。)

教師「一人ぼっちと言うのは、一人にされたということ？ どんな時ですか？」

C9「例えばいじめられて自分のものを取られてそれが悲しいと言う場合とかね。他の人はガヤガヤ一杯いるんだけどね、自分の心の中でも暗いなあつて言う感じで、一人しかいないっていうみたいになつちやつて、それがさびしくて恐いほどつ

—ここまでの板書—

悲しい時泣く

自分がかわいそう↓涙が先に出て止まらない

ひとりぼっちの感じ↓さびしい↓おそろしいほどつまらない

まらなくて、何もしたくないほど悲しくなつて、泣いてしまふんです。」

教師「さっきの『ぐくやしい』時に泣くと言う考え方の人と、この『悲しい』時に泣くと言う人の考え方と、関係している所があるね。それはどこだろう。」

C10「始めに黒板でまとめてあるのとくらべると、『いや・惨め・悲しい』などの気持と、悲しい時に泣くという事がつながっていると思います。なぜかと言うとね、私は『悲しいから泣く』のグループに入っているからです。」

C11「僕は、あとの『ぐくやしいから泣く』の方なんです。だから、譬一君たちの気持ちと似ているんです。やっぱり惨めの気持ちになるのは同じなんですけれど、ばくの場合、ぐくやしくて歯を食いしばっていると、自分が悲しくなつてきて、何だかイヤになつてくる気持になつて、それでとうとう我慢がしきれなくなつて泣くんです。」

安い涙は流さない

教師「これまでは、悲しさの涙と、悔しさの涙について考えてきました。この他の涙も何人かいます。それについて考えていきます。」

C12「僕は、ぐくやしい時とか悲しい時にはあまり泣かないんです。泣く時は、誰かに本当にものすごくやさしくされて、自分が嬉しいなと思つた時とか、そんな時に僕は泣きます。」

C2「今の雄大君の考えと似ているんですが僕の場合はね、いじめられていた時に誰かが助けてくれて、心の中でお礼とか、ありがとうと思つて、それで心の中でどんどんそういう気持ちがあふくらんできて、それで泣いちゃう……。」

C8「僕は嬉しいとか、やさしくされたとか、そういうんじゃないって、感動したり同情したりした時に僕は泣きました。」

やたらにぶつたりされて泣いたりしては、いつも泣いていなければならぬ、そんな安い涙を流しても何の値うちもないと思うんです。感

動や同情というのは、どうしても人間には必要なものじゃないかなと思うし、そういう時に泣いた方が、値うちのある美しい涙なんじゃないかと思いました。」

教師「うん。その安い涙というのは何ですか。」

C₁「安い涙っていうのは、泣かなくともいい時、涙の必要がない時やなんか、やたらにワンワン泣いて人を困らせたりして、全然値うちのない、人に嫌われるような涙のことを言うんじゃないかと思えます。」

教師「では、智和君は、黒板に書いてあるような『悲しい時』や、『くやしい時』には、泣かないわけだ。どんな時に泣くの。」

C₂「例として、この前感動した戦争映画をあげます。ある一人の少女が飢えて何かに苦しみながら死んだ時、すごく感動して、ちよつと泣いちゃった時があつて、そういう時など、どうしても涙が出るんです。」

教師「では、さつき言った『美しい涙』と言うのは？」

C₃「もし、人がいじめられたりした時に誰も助けてくれないとか、そういう時の話を聞いてかわいそうで泣いちゃったり、人間、愛情と言うか、そういう時に泣いてあげるのが美しいじゃないかと思えます。」

C₄「今の話を聞いていて思いついたんですが、前にすごく親切にされた

事があるんです。始めはただ、はしやぎ廻るといふか、絶対にお礼がしたいようなそういう嬉しい気になつたんです。でもその人は、『いいよ』つて言つて断られて、やっぱりこの人はやさしいんだな……、と思つている内に、涙がね、知らない内に出たの……。」

教師「そうか。ジワーつと出てきたんだね。」

C₅「うん。」

こうして、子どもたちは、自分が泣きに至る心理過程を、再構成し客観視した。『くやしさ』で人は泣くと思つていた子は、『悲しさ』で泣く泣きもある事を知つた。また双方の心理は、どこかで関連付く事も知つた。一方、人が泣く時は、悲しさや悔しさだけだと思つていたら、『嬉しい時』や、『感動』した時も泣く事も知つた。人間の泣きに意識を止め、自分の泣きの心理過程を内観し、美しく泣くことにまで話題は広がり、涙の価値へと子どもたちの視点は向いた。授業の最後は、涙の価値の再認識である。これは前掲『ワルのポケット』で、セイゾウがソーメン

に言つた次の言葉の解釈を求めたものである。

「ソーメン、もう泣くな。涙がそんなや。家にいいつけるといいよつたけど、そんなもん、おどかしだけや。」

教師「ワルのポケットの中で、セイゾウが、『涙がそんなや』と言う言葉があるでしょう。感動の涙や、美しい涙にまで学習が進んできた今日の授業のまとめとして、この言葉の意味を考えましょう。」

C₆「ぼくは、涙の値うちだと思います」

美和「こんな時に、いくら泣いても解消しないし、泣くだけ恥しい思いをするだけで、そんなに泣いても何もならない、損だと言うことだと思います。」

C₇「僕の考えはね、おこられている時に泣いても許してくれないし、泣けば余計おこられるから泣くような無駄なことはしない方がいいと思うことだと思う。」

C₈「さつき巨君が言つた考えに賛成ですが、例え先生に責められたり、おこられたからと言って、これから大人になるまで、いろんな事があるんだから、そんなことで泣いてたんじゃない駄目だぞ、と言っているのだと思ひます。」

教師「いろんな事というのは？」

C₉「うーん。例えばね、これからだつて大人になるまで、他にもつとひどいこと、うーん、友達か誰かが事故で死んじゃつたりして、そういうことだつてあるかも知れないから、先生に怖られたぐらいじゃ泣くな、つて言うことだと思います。」

C₁₀「あのね、こういう時よりもつ

と自分が泣かなくてはいいけない時があるかもしれないので、その時のために涙をとつておいて、おくことだと思ひます」

C₁₁「私は今の史恵さんとちよつと違うのですが、怒られている時にあやまつても仕方がないし、それより、これからの人生で本当に泣かなくちゃいけない時があるんです。きつと。だから、そんなに気安く泣いていたら、恥しい思いをして自分が損をするだけだから、そんなことはしないほうがいいという事だと思います。」

C₁₂「だからね、泣くという事はただみんなを緊張させるだけなんだから、そんな事で泣くな！ もつと涙を大事にしろつていうふうに入れてるんだと思ひます。」

ただのべつ泣くだけが良い事ではなく、さつき僕が言つたように、人生には本当に泣く時があるんです。これからの人生でね。そうした時に、美しい涙を流したいなあ、と、僕はこのセイゾウの言葉から思うんです。みなさんはいかがですか。僕の考えは——。」

(子どもたち一様にうなずき、そして期せずして拍手。)

美しい涙なら流してもいい……

再び子どもたちが、どんな時に泣きたいかを調査した際の資料をふりかえりたい。

・知っている人や、犬ねこが死んだとき

・知らない人や友達からやさしくされたとき

・長年の念願がようやくかなったとき

・勝負に負けてとてもくやしうとき

こうした事例に体験した時でも、子どもは泣かない。それは次の理由で泣きたくても泣けなかったからである。

・人前だから泣けない

・「よし泣くもんか」とがまんする

・なき虫、弱虫と言われるから

子どもは泣きを拒絶し嫌っている。

それは日本人の泣きは「屈服の涙」であり、人前で泣く事が恥とされる風土の中で育ってきたからであろう。それ故に、泣きの代りの方法は一つも無くても、なお泣くまいと耐えて来た子どもは、なお泣きまわった。また、社会道徳的にも、他人が泣く事に人はこらえ性をなくし、他人の泣き声、涙に対して分け入り共感することができなくなってきた近代人の道程の中で、子どもも変って来ている。これは、柳田國男や多田道太郎が指摘した通りである。

本章の授業はそうした子どもは、自然な構えを解き放ち、涙の価値を認識し、泣くべき時に泣ける感性を持つ人

間を育てたいと意図したものである。即ち、人間生存における涙の価値を再発見させたいとしたものである。

この授業を終えた一ヶ月後、私は八年間勤務した東京都・M区・H小学校から、S区に転任した。転任してからは、一ヶ月後、前担任学級の一児童から、手紙が届いた。

松原先生、この二年間どうもありがとうございました。私もやつと五年生になりました。これからも四年の何倍も勉強していきたいと思えます。

五年生になって新しい教室に行く時、また松原先生が受け持ってくださいような気がして、学校に行きました。

階段のところで、KちゃんとYちゃんが立っていました。見ると、Yちゃんが目になみだをためていました。Kちゃんも、今にも泣きそうでした。

「どうしたの？」と聞くと、

「松原先生がいなくて悲しいです」と言いました。そして松原先生とのことを話しているうちに、Yちゃん

の目になみだがうかんで来たというのです。

私も、Yちゃんのなみだを見ると、急に泣きたくなりました。でも、前に泣きの勉強を松原先生とみんな

やったので、ただの泣きはもうしないと思っていましたので、がまんしました。

「こんな時は、泣いていいんじゃないの」と、Kちゃんが突然言いました。

「美しいなみだはいいのよ」Yちゃんも言いました。

私は、そうかなあ、と思いました。が、先生のことを思い出して泣くのは、泣いてもいい泣きだろうと思うと、急になみだが出ました。三人して階段の下で泣いていました。

先生は、勉強の深く深くまで教えてくれたり、体育でも出来なかったら、何度も何度もやりなおして、出来るようにしてくれました。おこる時はとてもこわい先生でしたが、楽しい二年間でした。一台のエレベーターや、ワルのポケットのような授業なら、もつとやりたいと思うこともありません。

松原先生、次にいった学校はどうですか。いい学校だなあと思いましたが。いつまでも元気でいてください。二年間本当にありがとうございました。二年間の思い出、決してわすれません。もう会えないかもしれない松原先生に、この手紙を思い出に書きました。

では、さようなら。F・U子より

多田道太郎は「しぐさの日本文化で」

「屈服の涙から共感の涙へともう一度逆行しながら発展していくその道すじを、未来社会の姿として想い描きたい」と切望した。小学校四年生で人間の泣きを客観視し、涙の価値を発見した子どもたちは、あるいはそうした未来社会を築く一翼を担うようになるかもしれないと、子どもからもらった手紙を読み返しながら、秘かな期待を込めている。

(墨田区立・中和小学校・教頭)